慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	隣人としての米津昭子先生
Sub Title	
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.10 (2011. 10) ,p.126- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 米津昭子先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20111028-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

隣人としての米津昭子先生

米津昭子先生が亡くなられてからすでに半年余が過ぎた。先生の専門は商法であり、私の研究は中国政治史である。私は時には法律の話題を持ち出し、先生が長年務めておられた家庭裁判所家事調停委員の役割について伺うことがあった。先生もまた、たまには中国政治について質問されることもあった。しかし、その専門領域からして二人の間の会話はそれ以上に深まることはなかった。それより先生は、私にとって良き隣人であった。したがって、専門の話は他の方に譲るとして、私は良き隣人としての先生の想い出の一端を語ることにする。

先生は世田谷区役所前の世田谷四丁目に邸宅を構えておられ、私は隣接する豪徳寺二丁目の住人である。先生のお宅へは歩いて五分の距離にある。時には散歩の途中先生のお宅の前を通り、予告もなくふらり立ち寄ることもあった。そういう時も先生はいつも温かく迎えてくださった。先生のお宅を訪ねたことのある方はご存知のように、茶の間の畳の上には立派な長い机があり、そこが掘り炬燵になっている。そこが大変居心地よく、話を始めると去りがたくなる。そんなわけで、散歩の寄り道が夕方まで続くこともあった。

米津先生は若い時からゴルフをやっておられ、その腕前もなかなかなものである。退職後も先生は週に二回くらいコースに出られることもあり、その体力・気力に感心していた。先生のホーム・コースは足柄森林ゴルフ倶楽部であった。そこは東名高速の御殿場のわきにあり、大変便利なところであったため度々連れて行っていただいた。このコースはそれほど長くはないが、比較的狭く、結構難しかったことを覚えている。私の腕前だからいつも大たたきをするが、先生は嫌な顔もせず見守っていてくださった。

二〇〇二年三月に米津先生を含む一〇余人のかつての法学部の同僚とともにした台湾グルメ旅行も楽しい想い出として残っている。街のホテルのレストランで味わった贅沢な福建料理と、陽明山の山中で食べた台湾の素朴な郷土料理とのコントラストを皆で満喫した。そこには、侯孝賢の「悲情城市」を思い出させる光景があった。帰

国の三月三一日午後台北空港で大地震に遭遇した。それはまた、私が慶應義塾を去る最後の日でもあった。私は二〇〇八年五月にも四川省成都で大地震を経験した。どうも私の旅行には危険が付きまとうようである。

法学部のなかで米津先生とともに仕事をした一番大きな役割は、堀江学部長のもとで八年間務めた学部長補佐であった。学部長を囲む補佐の会ではあらゆる問題が議論される。いろいろ困難な問題にぶつかったとき、先生は責任を明確にしながら、物事をはっきり言われる点が私の印象に残っている。時には先生は学部長補佐として教授会で報告されることがあった。先生の声は良く通り、言語明晰な発言であることに私は気づいた。私はこのような先生の態度は学ぶべきであると思い、そうすべく心がけたこともある。先生のそのような態度がどこから生まれたのかよくわからない。思うに、それは先生の精神の論理構造に起因する面があるとともに、良き時代を良き家庭で過ごされた日々の経験によって培われたものかもしれない。

ここまで、いくつかの先生とともに経験したエピソードに言及してきたが、それ以上に大学とご近所で経験した先生とのお付き合いが私にとって最も貴重なものである。ここ数年は、かつてお世話になった先生への恩返しのつもりで、法学部懇親会や先生が主催された法学部名誉教授の会が終わったあと、車で先生をお宅まで送り届けることを私の役割と心得ていた。その先生が今はおられない。なんとも寂しいことである。

名誉教授　山田辰雄